

## 【日本語指導を行う教員の「日本語指導力の育成」及び日本語習熟度が低い生徒に対する「教科指導」の研究】

### 調査の目的・問題意識

本校では外国籍の生徒が全体の9割を超える中、日本語指導の経験がない教員の日本語指導力育成が喫緊の課題となっている。また日本語学級で1年程度の日本語学習を終えた生徒に、教科指導を十分に行うためには、日本語に配慮したカリキュラムの作成が必要不可欠である。そのため、日本語指導を行う教員の指導力のスキルアップを組織的・計画的に取り組むと共に、ICT機器を活用しつつ、教科指導のための効果的な授業を行うための教材開発・指導方法の研究を行うことを目的とした。

### 創出した先進事例

#### ◆実施に向けて検討・実施した方策

##### ①【日本語指導力育成カリキュラム】

日本語文法指導用の養成テキストの作成と、指導教員と日本語指導未経験の教員同士による、相互模擬授業を採り入れた研修の実施。

##### ②【日本語習熟度が低い生徒に対する教科指導】

日本語能力が不十分な生徒を対象としたICT教材の作成と、生徒のレベルにあった日本語の多読を取り入れた授業の実施。

##### ③【「個別最適な学び」「協働的な学び」を取り入れたICT機器の活用】

日本語指導用デジタル教材の作成・利用による「個別最適な学び」「協働的な学び」の実施。

#### ◆生じた成果・効果

①模擬授業を取り入れた研修・協議内で文法事項等も解説することで、生徒の日本語習得状況に応じた授業について深い理解に繋げる事ができた。夜間学級に着任し、初めて日本語指導を行った教員にとって、研修が授業の振り返りにもなり、授業改善に繋げることができた。

②授業における従来の紙教材とその解答・解説をデジタル教材として活用することで、生徒一人一人が個別の課題に取り組む中、教員用端末を利用し解説することで、同一授業内において個別に視覚的にわかりやすい指導を行うことができた。

③日本語指導用テキストのデジタル化に取り組む中、複数の言語に翻訳した文型説明と言語翻訳を表示できるようにしたことで、「個別最適な学び」となるきめ細かい指導ができるようになり、「協働的な学び」における生徒の躓きを未然に解消する指導ができるようになった。

#### ◆課題

- ・個別学習型の授業を基本とするスタイルを継続しつつ、「協働的な学び」の授業実践回数を増やすことが課題である。
- ・日本語指導経験のない教員育成を取り組みつつ、今後は経験のある教員の授業準備の負担等を軽減に取り組むことで、より質の高い日本語指導の授業を組織的に取り組むことが課題である。

### 調査研究を踏まえた今後の取組方針

日本語指導未経験者が指導法を録画し、自主的に学ぶことができる指導教材作りに取り組む。日本語指導経験のある教員のために、各教員が作成した補助教材のデータベース化に取り組み、学習指導のための授業準備の軽減と、指導方法を組織的により良く改善していくための先進事例の創出に取り組む。

## 「教育課程、教育環境整備に関すること」

## ～学齢の不登校生徒の学びの場としての夜間中学校の活用～

## 調査の目的・問題意識

## ◆目的

- ・学齢の不登校生徒の学びの場としての夜間中学校の活用について研究する。
- ・生徒の個別最適化に係る効果的な教育活動のあり方について研究する。
- ・高齢生徒の移動負担、体験活動等でより充実した教育効果を挙げ得る校外学習の在り方について研究する。

## ◆問題認識

- 令和2年10月時点において、全国の未就学者は約9万人、最終卒業学校が小学校の者は約80万人。
- 夜間中学の設置ニーズが、統計上より顕在化。

## 創出した先進事例

## ◆実施に向けて検討した方策

- ・夜間職員が区内全中学校を訪問し、不登校生徒及び日本語指導が必要な生徒を夜間学級へつなげる。

## ◆検討した方策の分析

- ・定期考査期間を活用した訪問の実施。
- ・事前に管理職同士によるスケジュール調整が必要。

## ◆実際に行った方策

- ・区内全中学校へ夜間学級の職員が訪問する。
- ・カタリバオンラインで取組を報告する。

## ◆生じた成果・効果

- ・不登校経験のある生徒の入級が増加した。
- ・夜間中学についての周知ができた。

## ◆課題

- ・9月ではまだ進路を考えられない場合が多く、9月の他、12月頃の訪問が望ましい。
- ・個別に区内の中学校を訪問することは夜間学級職員の負担が大きいため、区中学校研究会進路部会などの場での説明会も効果的である。

## 調査研究を踏まえた今後の取組方針

## ◆「学び」の支援／「ICT」の活用 など

- ・区独自の取組としての不登校生徒への学びの場としての夜間中学校の活用。
- ・日本語の学習コンテンツなどICTを活用した、個に応じた学びの支援体制を整える。

## 「教育課程、教育環境整備に関すること」

## ～生徒の個別最適化に係る効果的な教育活動のあり方～

## 調査の目的・問題意識

## ◆目的

- ・学齢の不登校生徒の学びの場としての夜間中学校の活用について研究する。
- ・生徒の学びの個別最適化に係る効果的な教育活動のあり方について研究する。
- ・高齢生徒の移動負担、体験活動等でより充実した教育効果を挙げ得る校外学習の在り方について研究する。

## ◆問題認識

- 多国籍、異年齢集団のため、個に応じた支援が必要。

## 創出した先進事例

## ◆実施に向けて検討した方策

- ・通訳者等を確保し、授業補助は勿論、生徒の行事への積極参加を促し、更には行事に生徒の意見を反映させる事で生徒の学校生活、学校教育の充実を図る。
- ・生徒一人一台端末(Chromebook)を活用し、この自主教材に準拠した日本語のデジタル教材の作成を行う。

## ◆検討した方策の分析

- ・各行事を始め、日本に入国したばかりの生徒に対して通訳のサポート等に活用する。
- ・Google翻訳の機能を活用して、単語の翻訳をつけた。紙ベースでは想定していない母語の生徒が入学した場合、対応できないが、デジタル単語帳なので、その都度、生徒の様々な母語に対応することができる。

## ◆実際に行った方策

- ・通訳の任用
- ・デジタル単語帳の作成(日本語テキストの課ごと)

## ◆生じた成果・効果

- ・初期の日本語指導にとっても効果的であった。通訳は週1日程度だったが、教育相談や学校行事等の説明において効果的だった。Chromebookは、毎日使用する翻訳や検索を行うツールとして効果的だった。Chromebookのアプリやコンテンツを更に充実させたい。
- ・単語のまとめ、派生語の入力などが生徒自身でカスタマイズでき、個別最適化した学習ができる。

## ◆課題

- ・週1日又は2日の勤務のため、保護者面談や生徒指導等の調整が必要。
- ・Google翻訳の誤訳が多く、確認作業に時間がかかる。

## 調査研究を踏まえた今後の取組方針

## ◆「学び」の支援／「ICT」の活用 など

- ・区独自の取組としての不登校生徒への学びの場としての夜間中学校の活用。
- ・日本語の学習コンテンツなどICTを活用した、個に応じた学びの支援体制を整える。

## 「教育課程、教育環境整備に関すること」

### ～より充実した教育効果を挙げ得る校外学習の在り方～

#### 調査の目的・問題意識

##### ◆目的

- ・学齢の不登校生徒の学びの場としての夜間中学校の活用について研究する。
- ・生徒の個別最適化に係る効果的な教育活動のあり方について研究する。
- ・高齢生徒の移動負担、体験活動等でより充実した教育効果を挙げ得る校外学習の在り方について研究する。

##### ◆問題認識

- ・高齢生徒の増加、歩行困難な生徒の在籍、ヘルプマークの使用者や特別な支援が必要な生徒の増加。

#### 創出した先進事例

##### ◆実施に向けて検討した方策

- ・修学旅行において借り上げバスを使い、より多くの日本の歴史・文化に触れる。

##### ◆検討した方策の分析

- ・貸し切りバスを使用することにより時間に余裕が生まれ、金閣寺や清水寺などに加え、奈良東大寺や法隆寺まで見に行くことができる。

##### ◆実際に行った方策

- ・大型バスの借り上げ
- ・バスガイドによる神社仏閣、歴史についての説明

##### ◆生じた成果・効果

- ・歩行が困難な生徒、高齢者にとっても効果的であった。
- ・バスガイドの説明がわかりやすく、生徒の理解を深めることができ、事後の壁新聞作成等に役立った。
- ・より多くの神社・仏閣等を見学することができる。
- ・借り上げバスを利用したことで、時間的余裕ができ、体験活動（座禅など）も組み込むことができた。

##### ◆課題

- ・生徒負担では夜間生徒数では借り上げバスは負担が大き過ぎる。

#### 調査研究を踏まえた今後の取組方針

##### ◆「学び」の支援／「ICT」の活用 など

- ・区独自の取組としての不登校生徒への学びの場としての夜間中学校の活用。
- ・日本語の学習コンテンツなどICTを活用した、個に応じた学びの支援体制を整える。
- ・より充実した校外学習の在り方については、引き続き借り上げバス等を利用するとともに、防災教育を始め、日本の歴史・文化体験等、実際に生徒が体験し、学ぶ事ができる取組を中心に行っていく。

## 「夜間学級における教育活動の充実」

## 調査の目的・問題意識

## ◆目的

## ①「日本語指導の充実」

日本語の習得が十分でない外国籍の生徒を多く抱える夜間学級において、一番の課題は日本語指導を充実させることである。また、教員には異動が伴うため、配属された教員に一定以上の日本語指導力を維持させることが日本語指導の充実には、不可欠である。

## ②「教科指導の充実」

日本語指導を充実させ日本語の習得が効果的に行われることで、教科指導をより早いタイミングで始めることができ、教科指導の時間をより確保することができる。また、学び直しの生徒も夜間学級に在籍していることを考えると、教科指導の充実も日本語指導の充実とともに推し進めていかなければならない。

## ③「本夜間学級の周知、生徒の負担軽減」

新設校であり設備が充実している本校の強みを広く周知することで、今まで施設面で入学を断念していた生徒へ学習の場を提供することができる。さらに、本校の教育活動において、高齢者や障害のある生徒の負担となる要素を取り除いていくことで、教育活動を充実させることができる。

## ④「誰一人取り残さない教育の実践、共生社会の実現」

昼間部の通常学級、軽度の知的障害等特別支援学級（固定学級）、夜間学級の3つの学級が併設されている中学校は都内では本校だけである。その特長を生かした教育活動を推進することで、「誰一人取り残さない教育の実践、共生社会の実現」を図る。

## 創出した先進事例

## ◆実施に向けて検討した方策

## ①「日本語指導の充実」

## ・共通教材の作成と利用

教員の異動によって新しく配属された教員（新規採用教員を含む）が日本語の指導を行わなければならない現状を考え、日本語学級のすべてのクラスの指導を「共通教材」「漢字」「読み」「会話」「作文」に分け、それぞれの指導時間数分の教材を独自に作成・実施し、日本語指導の充実を図る。

## ・クラス変更のための判定試験の作成

日本語学級から通常の学級にクラスを変更する際、また、日本語学級の中で、日本語の習熟度に応じて他の日本語学級に変更する際に実施する判定試験問題の作成を実施する。

## ・講師を招聘した日本語指導に関する研修の充実

今年度より日本語指導についてのカリキュラムを一新し、教材の共通化、根拠のあるクラス分け判定試験の作成等を行い、指導の充実を図っていく取り組みについて、客観的な評価を講師の先生を招聘して行う。

## ・講師を招聘したICTを活用した指導方法の充実

視覚的教材を活用して分かりやすく指導することは、日本語の習得において一定の効果をあげている。そこで、生徒一人一人及び教員に貸与されているタブレットに導入されているアプリの紹介や効果的な活用方法を講師の先生を招聘して行う。

## ②「教科指導の充実」

## ・各教科の指導力の充実

東京都夜間中学校研究会（以下、都夜中研と略す）に所属している7校の全教員とともに、都夜中研の各教科研究会において、主題設定を行い授業研究を推し進める。

## 「夜間学級における教育活動の充実」

## 創出した先進事例

## ◆実施に向けて検討した方策

## ③「本夜間学級の周知、生徒の負担軽減」

- ・本校は今年度新設された学校であり、エレベーターが2基設置されている等、バリアフリーを取り入れた構造となっている。今年度は、車いすで通学している生徒、半身にまひが残る生徒、足腰が弱く長時間歩けない生徒、聞こえに障害のある生徒等が入学してきた。23区にある他の夜間学級ではいずれも対応ができず、十分な教育活動が保証できないとの理由から入学を断られ、本学級に入学し、長時間かけて登校している生徒も一定数いる。来年度はさらに生徒間でのロコミ等により、23区内において、本学級に入学する生徒の増加が十分に見込まれている。本校としても、本学級の強みを広く周知することで、今まで設備等の面で十分な学習機会を得られなかった生徒に対しての教育の機会を提供していく。
- ・3年生が参加する京都奈良への1泊2日の修学旅行や全校生徒が参加する校外学習において、車いすの生徒や半身にまひが残る生徒、高齢の生徒が交通公共機関を利用した移動をした場合、見学場所に着くまでに体力の多くを消耗してしまうことが十分に考えられる。そこで、生徒の移動手段に貸し切りバスを利用することで、見学場所における教育活動の充実を図る。

## ④「誰一人取り残さない教育の実践、共生社会の実現」

- ・本校の昼間部生徒会の生徒、昼間部知的障害等特別支援学級(固定学級)の生徒、夜間学級の生徒が、パラスポーツであるボッチャを通じた交流を深めるとともに、共生社会の醸成を図り、多様性を受け入れ相手を思いやる気持ちを育てる。また、昼間部の生徒や教員が夜間学級で生徒が実際の学んでいる様子を見学する機会を設ける。

## ◆実際に行った方策

## ①「日本語指導の充実」

- ・教員の異動によって新しく配属された教員(新規採用教員を含む)が日本語の指導を行わなければならない現状がある。そのため、日本語学級のすべてのクラスの指導を「共通教材」「漢字」「読み」「会話」「作文」に分け、それぞれの指導時間数分の共通教材を独自に作成した。特に、「共通教材」には、教材内で使われている名称等の音源や文章の音声なども加え、聴覚優位の生徒にも対応できるよう工夫した指導を実践した。本学級の教員が視察に訪れた群馬県太田市での実践をもとに、日本語に初めて触れる生徒への教材として、語彙習得を目標とした本学級の最も基本的な日本語教材(60回分のパワーポイント教材/約1150枚)を作成し、ブラッシュアップを加えた上で指導した。
- ・日本語の習熟度別学級を編制するために判定試験を作成した。作成に当たっては、日本語能力試験[JLPT]における問題及び合格率等を参考に、実施時間を短縮して2単位時間程度[40分×2コマ以内]で行えるよう工夫し、一定の基準を定めた判定試験を行った。
- ・本校の日本語指導の実践について客観的評価を得るために、外国籍の生徒への指導経験が豊富で多言語多文化の専門家の講師を招聘し、研修会を2回実施した(令和6年12月9日実施、令和7年1月24日実施)。また、日本国籍のみならず外国にルーツをもつ生徒の中にも特別な支援が必要な生徒が多く在籍するようになってきているため、外国につながる生徒の発達の特徴や外国籍の生徒理解に造詣の深い講師を招聘し、生徒の事例研究及び発達支援の方法について研修を深めた(令和7年1月9日実施)。

## 「夜間学級における教育活動の充実」

## 創出した先進事例

## ◆実際に行った方策

## ①「講師を招聘したICTを活用した指導方法の充実」

・視覚的教材を活用して分かりやすく指導することは、日本語の習得において一定の効果があがるため、Teamsやミライシード等の活用に詳しい、区から派遣されたICT支援員に講師をお願いし、ICTを活用した日本語指導の一層の充実を図った（年4回実施、令和6年6月3日、令和6年7月10日、令和6年8月30日、令和6年11月22日）。

## ②「教科指導の充実」

・今年度より都夜中研のすべての教科研究会において、研究主題を決めその主題に沿って1年間研究を推し進めた。そして、1年に一度の研究授業を実施し、授業力向上に努めた。本夜間学級の教員においても、社会科・理科・保健体育科の3つの教科研究会のリーダーを務めることになり、都夜中研の中心的役割を担って指導方法等の充実を図った。その3教科以外においても、すべての教員がいずれかの教科研究会に属しているため、それぞれの教科での指導技術の向上に努めた。

## ③「本夜間学級の周知、生徒の負担軽減」

・東京都にある他の夜間学級では施設的に受け入れることが難しい生徒の受け入れを積極的に行うために、公共機関や駅等にポスターを作成・掲示した。また、区内の区立中学校に在籍している外国籍の生徒の進学先の一つとして、夜間学級を検討してもらえよう、区内の各小中学校に本校夜間学級のポスターとパンフレットを作成・掲示した。  
・3年生が参加する京都奈良への1泊2日の修学旅行や全校生徒が参加する校外学習において、生徒の移動手段に貸し切りバスを利用した。

## ④「誰一人取り残さない教育の実践、共生社会の実現」

・令和6年12月7日に、本校の昼間部生徒会の生徒、軽度の知的障害等特別支援学級（固定学級）の生徒、夜間学級の生徒がそれぞれチームを作り、区で主催しているボッチャ大会に参加した。また、2月には、昼間部と夜間学級の交流学習が行われた。2月14日には、夜間学級の生徒が昼間部のすべての教室を訪問し、自己紹介やクラスレク等を行い、交流を深めた。そして、翌15日には、昼間部の生徒会の生徒が夜間学級の土曜授業に参加し、夜間学級の生徒が授業を真剣に受ける様子取材した。この様子は、昼間部の全校朝礼で生徒会の生徒が報告する計画となっている。

## 「夜間学級における教育活動の充実」

## 創出した先進事例

## ◆生じた成果・効果

## ①「日本語指導の充実」

- ・日本語学級のすべてのクラスの指導を「共通教材」「漢字」「読み」「会話」「作文」に分け、すべてに共通教材を作成したことにより、新規採用教員が日本語の授業を担当した場合でも、ある一定レベル以上の授業が展開できるようになった。
- ・一定の基準を定めた判定試験（日本語能力試験〔JLPT〕における問題及び合格率等を参考に、実施時間を短縮して2単位時間程度〔40分×2コマ以内〕で行えるよう工夫した）を行うことで、今まで各クラスの人数によって在籍学級の変更を行っていたあいまいな学級編成が、日本語の習熟度による適切な学級編成となった。主な生徒の声として、クラス分け判定試験にむけて、なるべく高得点をとり、より上位のクラスへ移りたいという気持ちが多く、生徒に芽生えた。また、教員の反応として、学力レベルがより均一化することによって指導効果も高まり、昨年度よりも日本語の習得速度が上がった実感をもつ声が多く聞かれた。
- ・講師を招聘し、本校の日本語指導について指導講評をしていただいた結果、生徒の学習歴を把握しそれに基づいてクラス分けを行うこと、なるべく早めに母語を活用した教科指導を行うことが日本語の習熟にとってとても重要であるという新しい視点を示していただいた。

## ②「教科指導の充実」

- ・都夜中研における各教科研究会での授業研究は、今まで研修回数や研究内容が漠然としていたため、十分な研究を実施できてはなかったが、今回、年1回の研究授業及び、研究主題に沿った研究を進めることで、各教科とも例年以上の授業改善につながった。本校教員がリーダーを務めた3つの教科の内容と成果は次のとおりである。
  - 社会科では、やさしい日本語を使用した教材やICT機器を活用することで、多様な背景をもつ生徒に対応した授業づくりを教員同士で共有することができた。
  - 理科では、高齢の生徒に向けた授業を考える中で、知識の定着をよりすすめるために、日常生活で体験する様々な現象と関連付けて知識の定着を図るための工夫を今後の授業に役立てていけるようになった。
  - 保健体育科では、年齢や国籍及び教育環境等が多様化している夜間学級において、普段から授業を進めるうえで気を付けていることや工夫していること、困っていることを共有しながら、より安全で運動量を確保した授業改善につなげることができた。

## ③「本夜間学級の周知、生徒の負担軽減」

- ・ポスター及びパンフレット作成に関しては、地域や公共交通機関、公共施設等への周知資料の作成費として、文部科学省の予算を活用した。その結果、令和5年度の3月1日時点の生徒数は40名だったのに対し、今年度は同日比で+16名（56名）と、一定の効果を上げる形になっている。加えて、昨年度までは他県から通う生徒はなかったが、今年度は2名隣接県から通学している。また例年と同様、区内の学齢生徒の進学先に関する問い合わせが増え、来年度の入級生が2名決定している。2月末ということを考え合わせると、昨年度よりも多くの、日本での教育が必要な方々に、夜間学級の概要を周知することができたと考えられる。
- ・今年の修学旅行においては、実施時期が9月中旬だったこともあり、加えて猛暑での修学旅行であったため、すべての生徒にとって貸し切りバスでの移動は体力回復を図るに十分すぎる効果を得ることができた。見学場所ではある程度積極的に行動することができたため、今後は実施時期の検討もさることながら、移動手段としての貸し切りバスの利用は必要不可欠であると考えている。すべての生徒及びすべての教員から、次年度以降の貸し切りバスの導入の声が上がっている。

## 「夜間学級における教育活動の充実」

### 創出した先進事例

#### ◆生じた成果・効果

##### ④「誰一人取り残さない教育の実践、共生社会の実現」

・今回の区主催のポッチャ大会には、昼間部生徒会の生徒、昼間部軽度の知的障害等特別支援学級（固定学級）の生徒、夜間学級の生徒がそれぞれチームを作り参加することとなった。会場ではお互いのチームの応援を行い一緒になって勝利を喜び合うことができ、同じ学校の一員であるといった一体感が生まれていた。2月に行われた昼間部と夜間学級の生徒同士の交流においても、同じ時間をクラスという小さな単位で共有し一緒にレクリエーション等を行うことで、ともに生活する仲間意識の醸成を図った。そして最終的には、お互いを認め合う気持ちを高め、それぞれの心の成長を図ることができた。共生社会への理解がより推し進められるようになった。

#### ◆課題

- ・通常学級も含めた、夜間学級全体の教育課程の再編成
- ・クラス分け判定試験の実施時期やクラス分けの基準等の再検討
- ・教科学習を始める時期の再検討

## 「中学校教育を実施するために必要な日本語指導の在り方」

### 1 調査の目的・問題意識

本市では、令和6年2月末時点で外国人人口が約11万7千人で市区町村では大阪市に次いで2番目の人口であり、ここ数年増え続けている現状がある。令和2年から4年にかけて新型コロナウイルス感染症対策の入国制限等により一時人口が減少していたが、それ以前は5年間で外国人人口が約3割増加している状況である。また、令和4年の入国制限等の緩和以降、過去最高の外国人人口を更新している。

蒔田中学校夜間学級においても、日本語指導については、蒔田中学校の近くにある高校内に設置している日本語教室の利用のほか、課題別学習の時間を設け、個人の課題に応じた学習を行うことなどにより、日本語を含めた基礎学力の一層の充実に取り組んでいる。

令和6年度入学予定者は、年齢層や国籍が異なりそのほとんどが日本語指導を必要としていた。また、国語・数学・英語の習熟度や、音楽や体育などの科目における事前の知識等にも差異がある。

これらの現状を記録としてまとめ、本市における夜間学級の中長期的なビジョンを策定すること、日本語初期指導を始めとした、教科学習に必要な学習言語の指導、日本で生活するうえで必要な情報の提供、本市の生徒の現状に適した教育課程及び効果的な学習指導の実践に繋げること、及びきめ細かな指導体制の構築など、さらなる教育活動の充実を図ることを目的として本調査研究を実施する。

### 2 調査研究の内容

生徒の現状に適した教育課程及び効果的な学習指導の実践に繋げ、更なる教育活動の充実を図るために、本市におけるこれまでの夜間学級の経緯を振り返り、次の内容について調査研究を行う。また、今後の夜間学級の更なる充実のためにも、本市における夜間学級の中長期的なビジョンを策定し、年度末に研究紀要を作成し、一年間の研究の成果をまとめ、次年度以降の実践に繋げていく。

#### (1) 一年の流れ

##### 【入級時】

##### ○学級担任との教育相談（二者面談）

目的：一人ひとりの生徒の現状について把握し、自己実現に向けた手立てについて検討する。

内容：日本語と英語の理解度について、横浜市日本語教室（集中教室）への参加について

##### ○補助教材の選定

- ・生徒の学力、日本語の習熟度等に応じた補助教材（ICT教材含む）を検討、決定

##### 【5～7月】

##### ○夜間学級担当者会の実施

- ・習熟度別少人数授業の在り方について
- ・「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」「中学校教育を実践するために必要な日本語指導の在り方」のための指導上の工夫、課題などの検討
- ・学習支援サポーターによる支援の方法について、効果的な支援方法の検討
- ・各教科担当における日本語指導方法の確認
- ・日本語能力試験（JLPT）取得を目指した指導の在り方
- ・効果的な漢字学習の在り方について
- ・日本語習得を目指した読書活動の在り方について

- 日本文化、日本における社会生活などの効果的な体験活動の実施
  - ・遠足、芸術鑑賞の実施
- 健康管理、季節ごとの食体験として食育実施（年15回）

#### 【9～12月】

- 夜間学級担当者会の実施 講師を招いた研修会の実施
  - ・習熟度別少人数授業の在り方について
  - ・「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」「中学校教育を実践するために必要な日本語指導の在り方」のための指導上の工夫、課題などの検討
  - ・学習支援サポーターによる支援の方法について、効果的な支援方法の検討
  - ・各教科担当における日本語指導方法の確認
  - ・日本語能力試験（JLPT）取得を目指した指導の在り方
  - ・効果的な漢字学習の在り方について
  - ・日本語習得を目指した読書活動の在り方について
- 学級担任との教育相談（2者面談）
  - ・学習について、長期休業後の日本語習熟度の確認
- 日本文化、日本における社会生活などの効果的な体験活動の実施
  - ・芸術鑑賞、社会見学、修学旅行の実施
- 健康管理、季節ごとの食体験として食育実施（年15回）
- 3年進路面談実施（3者面談）
- 高校進学希望者への日本語教室面接練習会への参加指導等

#### 【1～3月】

- 夜間学級担当者会の実施、職員研修の実施
  - ・1年間の振り返り、年間日本語指導計画の作成
  - ・効果的な漢字学習の在り方について
  - ・日本語習得を目指した読書活動の在り方について
- 学級担任との保護者面談（3者面談）
- 日本文化、日本における社会生活などの効果的な体験活動の実施
  - ・書初め展示、球技大会、感謝を伝える会、卒業証書授与式等の実施
- 健康管理、季節ごとの食体験として食育実施（年15回）
- 研究紀要の発行、配付
  - ・生徒の文集の部分で、この1年間の日本語能力の向上、一人ひとりのがんばりや思いを確認
- 夜間学級入級説明会実施
  - ・夜間学級紹介（授業、行事、学校生活、費用、持ち物等）
  - ・プレオープンスクール説明
  - ・入級予定者の日本語能力の確認
- プレオープンスクール実施
  - ・日本の学校生活の体験
- 夜間学級案内の多言語版作成、配付
  - ・やさしい日本語、英語、中国語、タガログ語、ネパール語版を作成、配布。
  - ・各区役所及び国際交流ラウンジでの配付、及び本市HPでの掲載

(2) 本市における夜間学級の取組

毎年、年度末に研究紀要を一年の成果としてまとめてきた。さらに、横浜市立中学校夜間学級が本校に統合されて10年の節目である昨年度、記念誌作成を行った。今後もこの研究紀要を作成することで本市における夜間学級の取組について、歴史的な経緯や変遷を含めてまとめ、後世に伝えていく大切な資料としていきたい。

(3) 習熟度別少人数授業の在り方について

毎月、専任教諭だけでなく、教科担当の非常勤講師、学習支援サポーター、養護教諭、スクールソーシャルワーカーも含めて、夜間学級の担当者全員が参加する、夜間学級担当者会議の実施をすることを通じて、習熟度別少人数授業のよりよい在り方について常に情報交換と実践検討を重ねている。また、各教科担当における日本語指導方法の確認をすることで中学校教育を実施するために必要な日本語指導の在り方について検討している。

成果としては、各教科で、ふりがな付きの教材や英語訳や母語訳付きの教材を作成し、イラストや映像教材を活用する等の工夫を行い、日本語力向上に役立った。教科学習の語彙力を高めるために、各教科で日本語の音読や日本語の意味の確認を丁寧に行った。タブレットやクロームブック等の ICT 機器の活用により、映像や画像等、視覚に訴えるような授業展開が今まで以上に可能となった課題としては、生徒の日本語能力以外に、学習内容の知識にも大きな差があるため、日本語能力だけで習熟度に分けると、学習の習熟度が大きく違うことがあり、指導が難しい場合もあった。教科書の母語の翻訳資料があると学習内容の理解が進む。翻訳には外部の支援が望まれる。各教科の担当教諭が、教科指導だけでなく、日本語指導もしながら、授業を行なわなければならない、負担は大きくなってしまふ。

(4) 日本語補助教材の選定について

平成30年度から公益財団法人三重県国際交流財団発行の日本語指導テキストである「みえこさんのにほんご」「続みえこさんのにほんご」および「れんしゅうちょう1」「れんしゅうちょう2」を主たる日本語補助教材として使用してきた。しかし、主に小学生向けの内容であるために、昨年度から新たな日本語補助教材を模索してきた。

「れんしゅうちょう1」に代わる教材として、横浜市日本語支援拠点施設作成の「ひまわり練習帳 そら1・2」を使用している。基本的な書字動作を身に付けている年齢層である本校生徒には、よりコンパクトにまとまっている、これらの教材がより適切であると判断した結果である。

また、「みえこさんのにほんご」と「続みえこさんのにほんご」は、今後も引き続き基礎的な教材として使用しながらも、ある程度日本語学習の基礎ができている生徒に対しては、発展的な教材として「中学生のにほんご 学校生活編」「中学生のにほんご 社会生活編」を併用して、夜間学級生徒の学校生活により直結した教材内容で日本語学習を進めることができたのが成果である。

今後も、対象生徒の日本語力や特性に合わせて、適切な指導教材を選定することが重要である。

(5) 学習支援サポーター（通訳支援スタッフ）を活用した教育活動の在り方について

本校には、来日間もなく日本語がほとんどわからない状態で入級する生徒が多い。専任教諭が全員多言語での対応ができるわけではない。そのため、常に通訳が必要な生徒がいる中、学習支援サポーター（通訳支援スタッフ）がいない日もあり、対応が難しい時も多々あった。学習支援サポーターに

よる英語、中国語、ネパール語、タガログ語での学習支援により、学習の理解度が高まった。また、必要に応じて面談にもサポーターに同席してもらい、外国籍の生徒や保護者との意思疎通を図ることができ、生徒が安心して学校生活を送ることにもつながったため、夜間学級を運営するうえで必要不可欠な存在である。

現在は、4名の学習支援サポーターが週3回ずつ勤務しているが、さらに充実した支援体制を確立していく必要がある。

#### (6) 横浜市日本語教室（集中教室）や日本語支援拠点施設等（ひまわり）との連携による成果と課題について

希望する生徒は横浜商業高等学校の日本語教室に週2回通って、日本語学習を行っている。本校は、入級後集中的に日本語指導をするのではなく、すべての教科を通して日本語指導を行うカリキュラムであるため、今後も日本語教室との連携は継続していきたい。日本語拠点施設では、受験期に面接練習会を実施し、例年本校生徒も参加している。今年度は4名の対象生徒がいて、この連携により充実した試験体制を整えることができた。今後もこういった連携は継続していきたい。

課題としては、日本語教室の授業の時間によっては、夜間学級の1校時目の授業に重なり、1週間に2回ほど夜間学級の1校時の授業に出席することができないという点がある。

#### (7) ICT機器の活用について

外国とつながる生徒や日本語能力に乏しい部分がある本校夜間学級生徒について、ICT器具の活用は現在必要不可欠なものとなっている。家庭と学校の連絡システム「すぐー」やL-GATEを活用しての毎日の健康状況の確認は生徒を把握する上で十分に役立っている。

教科指導についても、翻訳機能や習熟度別の学習を可能として、日本語をよりよく指導するための術となっている。その効果によって、生徒が学習をあきらめずに前向きな姿勢で学習することに繋がっている。

遠足、修学旅行、芸術鑑賞、社会見学などの学校行事においても、調べ学習しての事前学習、振り返りまとめとしての事後学習において、より深い学習を可能としている。

#### (8) 日本語能力試験（JLPT）取得を目指した指導の在り方について

外国籍生徒には、令和元年度より積極的に日本語能力試験（JLPT）取得を勧めている。進学や就職にも有効な資格の取得を目指すことは、日本語学習の意欲につながっていると感じている。生徒は自分自身の日本語能力に合わせてN1～N5の受検級を選択し、学習をしている。主に、国語の教科学習や課題別学習の時間を通じて、市販の問題集を教材に学習を進めている。今後も継続して取り組んでいきたい。

#### (9) 効果的な漢字学習の在り方について

夜間学級では課題別学習の時間を活用して、漢字学習に取り組んでいる。各自の習得度に合わせて、自分で目標を設定し、ひらがな・カタカナからスタートする生徒もいれば、小学校高学年の漢字からスタートする生徒もいる。漢字テストの試験範囲を狭め、生徒にとって取り組みやすい形に変更し、継続して取り組んできた。週1回の漢字テストに向けた自習、復習の取組が定着しており、日本語習得への意欲が高まった。その結果、各教科学習の促進にもつながり、生徒間の日本語でのコミュニケーションが活発になった。また、eboardというICT教材を利用することで、ふりがな付きのデジタルドリルや

映像教材を使って、学習進度や理解度に差がある生徒も自分に合った課題で学べるようになった。e board は、AI型学習ドリルではないものの、ふりがな付きデジタルドリルで繰り返し復習できることによって、小学校漢字の定着にも一定の成果が見られた。

#### (10) 日本語習得を目指した読書活動の在り方について

課題別学習の時間に、「読書の時間」として、自分で本を読む時間と、教職員の読み聞かせや本の紹介を聞く時間を週1回設けている。夜間学級職員だけでなく、学校司書とも連携して選書したり、学校図書館を利用する機会も設けることで、夜間学級生徒の読書体験に広がりを持たせることができた。ふりがなが付いた児童向け文学や日本語初級者向けの書籍、絵本、日本文化に関する多言語の本など学級文庫を充実させることによって、生徒の日本語習得への意欲が高まった。その結果、各教科の学習の促進につながり、生徒間の日本語でのコミュニケーションが活発になった。

### 3 調査研究を踏まえた今後の取組方針

今年度の本校の取組について、成果と課題をまとめてきたが、年々入級者の学びのニーズが多様化している現状がある。常に変化する社会とともに、本市における夜間学級の中長期的なビジョンを策定し、日本語初期指導を始めとした、教科学習に必要な学習言語の指導や、スクールソーシャルワーカーを積極的に登用して日本で生活するうえで必要な情報の提供等をし、本市の生徒の現状に適した教育課程及び効果的な学習指導の実践に繋げる等、きめ細かな指導体制の構築及び教室等の教育環境整備など、今後もさらなる教育活動の充実を図っていきたい。

## 「Ⅰ. 教育課程、教育環境整備に関すること」

### 目的と現状

#### ◆目的

- 中学校夜間学級において教育機会の提供拡充をより一層推進するために、生徒一人一人の実態に応じた教育内容の充実と効果的な指導を行うことが必要であり、そのような指導の向上を図るための調査研究を行うとともに、その成果を積極的に広報する。また、さまざまな生徒への教育機会の提供拡充に資するため、中学校夜間学級について広く他都市の情報収集及び情報提供を行う等、調査研究を推進する。

#### ◆現状

- 本市の三つの夜間学級では、義務教育未修了者に加えて入学希望既卒者、外国籍の者等、受け入れる生徒は多様化しており、年齢や国籍、生活習慣が異なる生徒への対応が難しく、生徒一人一人に寄り添った学習指導が求められる。また、小学校未就学の者から中学を卒業した既卒者まで在籍するという現状において、一人一人の習熟の差は大変大きく、通学の目的も中学校教育の履修のみならず、高等学校受験など多様である。

### 成果と課題

#### ◆成果

- 生徒文集の作成について、1年間の学級活動の柱として、年度当初より取り組んだ。文集指導を通して、生徒理解を深めながら、生徒の日本語運用能力の育成を図ることができた。また、文集作成を通して、生徒が入学前の自身の姿を振り返り、共有することで、自己肯定感の醸成につながった。各校で作成した文集を、府内の夜間学級や学校協議会、昼間の学校や地域等に配付することにより、夜間学級の広報に努めた。
- 2024年度近畿夜間中学校生徒会連合会新入生交流会、2024年度近畿夜間中学校連合作品展が実施され、近畿圏内の学校との交流を含めた連携ができた。また、第70回全国夜間中学校研究大会では、実行委員会等事務局との連携を通じ、取組の充実を図ることができ、その資料を活用し、他都市の情報収集に努めた。
- 校外の研修会等にはオンラインを併用して参加するとともに、研究授業、教材作成や日本語指導に係る意見交換等については校内研修を実施した。
- 他都市との情報交換については、大阪府内の学校と積極的に情報交換を行い、それぞれの課題や教育実践の交流ができた。
- 校外学習を実施することができ、学齢期に十分な教育を受けることができなかつた生徒にとって、校内の教育活動では体験できないことを学び、非常に貴重な機会となった。
- 本市教育委員会事務局として「令和7年度大阪市立中学校夜間学級入学説明会・相談会」を市内4箇所にて実施することで、より多くの希望者への教育機会の提供拡充をすることができた。

#### ◆課題とこれから

- これまでの求められていた夜間中学が、時代と共に大きな変革期を迎えている。生徒の多様化や、個に応じた対応への課題等、個々の学校での対応は難しく、大阪市として課題解決に向けた取組を進める必要がある。抜本的な見直しを今後も引き続き検討していく。

# 【調査研究事項番号 I 教育課程、教育環境整備に関すること】

団体名 大阪府岸和田市立岸城中学校

## 「中学校教育を実施するために必要な、 日本語を母語としない人向けの日本語指導の在り方」

### 調査の目的・問題意識

#### ◆目的

- ・9割を超える生徒が外国籍であるという現状で中学校教育を実施するために必要な日本語指導の在り方を追求する

#### ◆問題認識

- ・日本語が全く分からない生徒に対して最長9年の在籍中に中学校教育の一端でも学ばせたい

### 創出した先進事例

#### ◆実施に向けて検討した方策

- ・個に応じた指導体制の整備
- ・教員研修の充実と指導力向上
- ・生活場面で活用できる日本語指導や学習指導の充実と推進

#### ◆検討した方策の分析

- ・生徒一人ひとりの教育的ニーズに対応できるよう、日本語能力を測るアンケートの実施し、課題や目標を正確に把握できるよう努めた
- ・宿泊学習の準備や行程等で、必要となる活動場面（会話や買い物、質問する内容等）を想定し、各教科で学ぶ内容を相互に関連付けながら教育活動を進めた

#### ◆実際に行った方策

- ・各学習コースについて可能な限り複数の教員を配置し丁寧な指導体制の構築に努めた
- ・日常生活を送る中で必要な活動場面（日常会話、病院受診や買い物、道の尋ね方、公共交通機関の利用方法等）から、各教科の学習課題を設定しながら学習指導を進めた
- ・個々の日本語能力に応じて、母語や翻訳機能を用いた端末などを活用した
- ・教員の日本語指導力の向上に向けて講師を招いて研修を実施した
- ・毎月の研究委員会で、教材の情報を共有し指導力の向上に努めた

#### ◆生じた成果・効果

- ・6月と12月に実施した日本語の語彙力に関するアンケートの結果、50項目のうち31項目の正答率が上昇するなど、生徒全体の日本語の理解が進んでいることが分かった
- ・研究委員会での教材の共有、日本語指導指導員の教材の紹介、教職員の相互授業参観等の結果、教職員全体の指導力向上を図ることができた

#### ◆課題

- ・本校には様々な国の生徒が在籍しており、生徒の日本語能力や習熟度もさまざまである。全ての生徒のために分かりやすい一斉指導と一人ひとりの状況に応じた個別指導の両立が課題である

### 調査研究を踏まえた今後の取組方針

#### ◆教員の更なる日本語指導力の向上と教材の充実

- ・本校には現在日本国籍の方を含め16か国の方が在籍している。この傾向は今後も続くと考えられるので、我々教員には日本語指導力の更なる向上と教材の充実が求められている。また、ICTを活用した指導や教材の活用も含めて、全ての生徒にとって分かりやすい授業や環境づくりが必要であると考えます。

## 【調査研究事Ⅳ】

- ① 学齢期に十分学ぶことができなかつたために自己肯定感が高まりにくい生徒の自尊感情を高める支援のあり方
- ② 日本語理解に課題のある外国籍の生徒の、自己実現に向けた支援のあり方

## 調査の目的・問題意識

### ◆目的

- ・「多様な背景をもつ生徒の自尊感情の回復・獲得」と「外国にルーツのある生徒の自己実現」

### ◆問題認識

- ・学齢期に学ぶことができなかつた生徒の自己肯定感や自尊感情をテーマとした取組は、なかなか視点のあたらない部分であるため、積極的な取組や研究が必要。
- ・生徒の背景が多様になる中、各種面談や進路懇談等に生徒が安心して臨むことができるような体制の構築及びその在り方の研究が必要。

## 創出した先進事例

### 多様な背景をもつ生徒の自尊感情の回復・獲得

#### 【体験学習の充実】

- ▶新入生歓迎会、連合作品展、市内作品展示会
  - ▶学習旅行（京都市・京都水族館）
- ⇒仲間との協働・協力、学校外での知見の広がり  
級友との体験学習を通して学びを深めるとともに、  
日本文化に対する知見の深まり

#### 【体験を自己表現】

- ▶総合学習発表会
  - ▶各種作品展
- ⇒参加者の感想文を生徒に  
フィードバック

### 体験学習の充実の成果と課題

～生徒アンケートより～

- 「新しい友だちに会えてうれしかった。」
- 「司会をするというチャンスをもらい、よくできた。」
- 「みんなそれぞれの学校の発表が見れてよかった。」
- 「他の学校の前で話して、緊張した。」
- 「ごはんをみんなで食べたのが楽しかった。」

【今後】校外の体験学習へ参加できない生徒も多い。そのため、  
事前や事後の学習や、学習校内でも体験的な活動を充実させていく

- ・新しい出会いや体験に喜びを感じ、協働的に学習に取り組む様子
- ・集団をまとめる責任感
- ・普段の何気ないことに気づくことができる感受性

### 外国にルーツのある生徒の自己実現

#### 【翻訳文書の活用】

進学や就労等、自らのキャリアを形成する際に「在留資格」の知識は欠かせない。進路懇談等で翻訳文書を活用し、生徒自らがキャリアを形成できる力を育成する。  
⇒日本語理解が初歩の生徒にとって安心感

#### 【通訳者派遣】

入学希望者面談、検診、学期末懇談、進路に係る懇談時派遣。外国籍の生徒に対する確実な意思の疎通と丁寧な生徒理解を図る。  
⇒安定した学校生活やきめ細やかな支援  
卒業後の進路を見据えた支援につなげる

### 翻訳文書・通訳者派遣の成果と課題

翻訳文書：在留資格の基礎知識

派遣：入学希望者面談、総合健康診断、内科検診、学期末懇談、進路懇談

通訳者派遣実施後の生徒アンケート「通訳者はあなたにとって助けになりましたか」

「とても助けられた」…73%、「すこしは助けられた」…27%

生徒全員が肯定的な回答であったことから、非常に有効であり、生徒の安心感につながっている

【今後】より幅広い言語に対応できるよう通訳者を確保し、適切な派遣体制の構築をめざす。

# 「教育課程、教育環境整備に関すること」

## 調査の目的・問題意識

### 1. 目的

- ・生徒の背景やニーズが多様化している中で、生徒の実態に応じた教育課程の編成と教材作成をする。（外国籍生徒の日本語指導、特別支援学級生徒、小学校課程を含む。）
- ・誰もが安心して学べるように教育環境や相談体制を整備する。

### 2. 問題認識

- ・進路保障の多様化と個別最適化の必要性
- ・生活相談の体系化と継続的な支援体制の強化
- ・不登校経験者のための学び直し支援と個別最適な学習環境の整備

## 創出した先進事例

### 1. 実施に向けて検討した方策

- ①日本語指導とそれに続く小中学校教育課程
- ②進路保障にむけての保護者を含む相談体制と補習学習
- ③SC, SSWを活用した相談体制
- ④校内研修会等を実施して教職員のスキルアップをはかる
- ⑤学校見学や各研修会に参加しての先進事例の研究

### 2. 検討した方策の分析

	効果	課題
①	・日本語能力を向上させることで、教科学習へのスムーズな移行が可能になる。	・日本語学習と教科学習をどのように配分するか。 ・日本語習得の進度に個人差があるため、個別対応が求められる。
②	・目標設定ができることで、学びの意欲が高まる。 ・補習学習の実施により、進学・就労に必要な学力を確保できる。	・進路情報が適切に伝わらないケースがある。 ・働きながら学ぶ生徒が多く、十分な補習時間を確保するのが難しい。
③	・不安を抱える生徒が支援を受けることで、学習継続につながる。 ・過去に学習機会を失った人への心理的ケアが可能になる。	・SC,SSWの配置が限定的で、十分な支援ができない可能性がある。 ・悩みを抱えていても、相談につながりにくいケースがある。
④	・教職員の専門性を高め、多様な生徒に対応できる指導力の向上につながる。	・教職員の負担が多く、時間の確保も難しい。 ・学んだ知識を日々の指導にどう活かすかが課題。
⑤	・実践的な指導法が習得できる。 ・自校の実情に応じた改善策の検討が容易になる。	・自校の課題に合った形での導入をする必要がある。 ・時間の確保が難しい。

### 3. 実際に行った方策

- 認定された5クラスを日本語の習熟度に合わせて6クラスに再編成して授業を実施。
- 日本語習熟度におけるクラス編成の日本語指導授業カリキュラムの作成と改良。
- 授業者以外の教職員や専任スタッフ（スクールサポートスタッフ）がTTや抽出授業など授業へのサポート。
- 学習の定着をはかる為、補習学習の実施や電話連絡や家庭訪問での登校の促し。
- 校内授業研究や外部講師による日本語指導研修を実施。
- 外部講師を招いての研修会（人権、在留資格、交通安全、救急救命、SC、SSW等）を実施。
- 他校での研修会（小学校、生徒会交流を含む）への参加、学校や施設の見学。
- 多様な背景を持つ生徒への様々な手続きの補助や相談
- 専任スタッフ（通訳）の配置。

# 創出した先進事例

## 4. 生じた成果・効果

- 様々なサポート体制を整えたことで、日本語習得の向上が見られ、半年での日本語習熟度別クラスの進級が実現した。また、高齢で長期間の通学が難しい生徒や、特別支援を必要とする生徒についても、できるだけ個別に対応することで、安心して落ち着いて学習できる環境を整えることができた。
- 校内授業研究や日本語指導研修の実施により、日本語の授業における教員の不安が軽減され、授業力の向上が図られた。さらに、様々な研修会を通じて生徒理解の深化と教職員の意識向上が見られた。
- 本学級には、小学校に通えなかった生徒や、小学校時代から不登校だった生徒が在籍している。学校見学や研修会に参加することで、小学校の取組みを参考にした資料作成や授業の工夫が進み、指導に役立てることができた。
- 人権、在留資格、交通安全、救急救命（AEDを含む）、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーに関する研修会を実施したことで、生徒理解が深まり、教職員の意識改革が図られた。
- 他校での研修会（小学校や生徒会交流を含む）や学校・施設見学を通じて、先進事例の知見を得ることができた。これにより、自校の取組みの点検・見直しを行い、行事運営の工夫や生徒への配慮につなげることができた。
- 生活保護関連、就学援助関連、通学定期関連の相談援助や、検尿・結核検診の指導、病院への付き添いを含めた健康相談援助を実施した。また、保健講話や学校行事を通じて、日本での生活ルールやマナーの理解が進み、生徒が安心・安全な学校生活を送れるよう支援した。
- 専任スタッフ（通訳・スクールサポートスタッフ）やボランティアスタッフ（地域の方々や大学生）の協力により、高校進学希望者全員の進学や、半年での日本語習熟度別クラスの進級が実現した。また、特別支援を必要とする生徒への個別指導では、落ち着いて学習できる環境を整えることができた。

## 5. 課題

- 日本語指導では、毎年課題を設定し、研修を通じて指導方針の確認や修正に取り組んできた。しかし、学習理解度や進度の個人差が大きく、個別対応の強化が引き続き求められる。特に、途中入級者や体験入学者に対しても同様の対応が必要である。
- 日本語が十分でない外国籍生徒に対して、通訳が配置されていない国の生徒や、通訳が不在時の対応が難しく、連絡や意思疎通、進路相談、日本での生活アドバイスが十分に行えない場合がある。
- スクールカウンセラーに相談する際、通訳の配置が不足しており、心理的ケアが十分に行えないことがある。

## 調査研究を踏まえた今後の取組方針

### 1. 「学習」と「生活」の支援

- 夜間学級は、学びの場であると同時に、安心できる居場所であり、信頼できる教師がいる場としての役割を担っている。特に、高齢で就学機会を希望する生徒や、日本の文化や生活ルールを十分に知らない外国籍の生徒、さらに、今後増加が予想される不登校経験者や特別支援が必要な既卒生徒にとって、夜間学級は重要なセーフティーネットの役割を果たしている。今後も、日本語指導を含めた学習指導に加え、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを含めた相談体制の整備に努める。加えて、特別活動や学校行事の場を活用し、日本で安全に安心して生活していけるよう、生活ルールやマナーの理解を促していく。
- 多様な背景を持つ生徒に対応するため、限られた教職員数でも効果的に指導できるよう、教材の工夫や指導方法の改善に引き続き取り組む。
- 高校進学を希望する生徒への支援に加え、高校に進学しない卒業生の多くが、夜間学級での継続的な学習の機会を求めている。そのため、夜間中学卒業後の生徒の居場所づくりについても検討を進める。

# 2024 年度東大阪市立意岐部中学校夜間学級【調査研究事項番号1】 研究テーマ『中学校教育を実施するのに必

## 要な、日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方～仲間とともに学びを綴り生活を綴るおとなの中学生』

### 生徒の現状

日本、韓国、中国、ネパール、フィリピン、パキスタン、ベトナム、カンボジアの8ヶ国の生徒が登校。外国籍生徒数67人(全生徒における91%)。日本国籍だが中国ルーツの生徒や外国で育った生徒も在籍。また、「学び直し」の生徒は28人。一人ひとりその背景や状況、学習経験が異なっている。

### 【学校園教育目標】

- ①人権尊重の精神に則り、一人ひとりが自らの生き方を主体的に決めていく力をつける。
- ②国際理解と多文化共生の観点から、互いの違いを認め合い支え合う力を培う。
- ③あらゆる課題解決に向けて自ら学び、自らの思いや願いを発信できる力を培う。
- ④集団生活を通して自らを見つめ、自己肯定感を培う。

【めざす子ども像】日本社会の中での自分の立場を、近現代の歴史やその社会的背景と重ね合わせて認識し、現代社会を生きる中で、仲間とつながり、自分の思いや願いを表現していく生徒。  
(中学校区のみめざす子ども像) 自分の夢生き方を創りつづける子

### 【今年度の学校園経営方針】

- 自ら学び、自らの思いや願いを発信できる表現力、言語力を培う。
- 自尊心を育み、自ら考え、判断し、行動する意欲と力を培う。
- 異なる国・民族を互いに理解し尊重し、認め合い支えあえる集団を育成する。
- 健康について考え、自らの生活に活かしていく知識と行動力を養う。

### 調査の目的 生徒たちの思い

- ・日本での生活を安心して送ることができるよう日本語を学びたい。
- ・日本での生活の困りごとを分かち合いたい。
- ・夜間中学校の学びを充実させたい
- ・夜間中学の存在を広く広め、学びを必要とする人たちに届けたい

生徒たちの日本での生活がより豊かなものになるように

目 重 標 点	○生徒の実態に基づいた指導内容および指導方法の工夫改善をすすめ、夜間中学生が自分の立場を深く振り返られるような実践に努める。	○国際理解と多文化共生、人権尊重の精神に徹し、部落差別・民族差別・障がい者差別・性差別等の人権侵害を見ぬく知識と感性を養い、差別を許さず差別をなくす実践力を培う。	○本名とは何かや互いの文化について考え、自分の名前やルーツについて深く学ぶことを通して、自らの生き方を創造していく力を育む。互いの名前や文化を大切に作る集団の育成を図る。	○識字学級等と連帯し、国際識字年推進東大阪連絡会の趣旨に沿った取り組みを推進する。
取 り 組 み	・月に1回の校内研修会。 ・布施夜間との合同研修 ・布施夜間との授業交流 ・二者懇談により生徒から思いを聞き取り、深める ・仲間への発信 ・仲間の思いを聴き、思いを共有する	・各行事と連携した特別活動または総合の時間での学びの提供。 ・夜間中学校合同学習発表会に向けての学習の中で取り入れる。 ・「朝鮮文化に親しむ東大阪子どもの集い」や「中国の子の集い」への参加	・各行事と連携した特別活動または総合の時間での学びの提供。 ・「民族と文化」に関する授業の中で自らの名前やルーツについて考え、仲間と共有する。 ・「朝鮮文化に親しむ東大阪子どもの集い」や「中国の子の集い」への参加	・夜間中学校合同学習発表会広報活動。 ・識字についての学習。 ・初任者研修、中学校区の教職員研修で中学校夜間学級について紹介。 ・小学校との交流。
成 果 と 課 題	・生活者として日本で暮らすことの喜び、不安など様々な思いを文章にして表現をすることができた。 ・新渡日の生徒に、個別の支援を行う時間を十分にとることができなかった。	・できる限りの人権学習を総合学習の時間を使って取り入れた。 ・日本語理解が難しい生徒には深く踏み込むことができなかった。	・様々な場面で自分のルーツと向き合う場面を設定した。舞台での発表や、作文を朗読した生徒はその後の生活の中で自信をもって取り組むことができるようになった。	・生徒会を中心にピラ配りをしたり、HPを常時アップしたりすることで積極的に広報活動ができた。またオープンスクールや東大阪の初任者研修など、生徒の声を、たくさんの人に発信することができた。

### 今後の取り組み方針

○日本に来たばかりの生徒の日本語指導 ○ICTを活用した学習支援 ○進度が違う場合の日本語指導 ○やさしい日本語を用いた生徒同士の意見交流

# 2024年度 布施中学校夜間学級【調査研究事項番号1】

## 研究テーマ『学び合う、聴き合う、高め合う、「おとなの中学生へ」』

### 生徒の現状

- ・夜間学級に通う理由は生徒によってさまざまであるが、一人ひとりが日々の自他の学びを大切にして学校生活を送っている。
- ・高齢の生徒は読み書きの定着が十分でない生徒もあり、病院や行政上の手続きなど、生活上の不安を抱えている方もいる。
- ・夜間学級の仲間を大切に、共に学ぶことをについて非常に意欲的である。

### 学校園教育目標

- ①人権尊重の精神に則り、一人ひとりが自らの生き方を主体的に決めていく力をつける。
- ②国際理解と多文化共生の観点から、互いの違いを認め合い支え合う力を培う。
- ③あらゆる課題解決に向けて自ら学び、自らの思いや願いを発信できる力を培う。
- ④集団生活を通して自らを見つめ、自己肯定感を培う。
- ⑤健康について考え、自らの生活に活かしていく力をつける。

### 【めざす子ども像】

国際理解と多民族多文化共生、人権尊重の精神に徹し、豊かな人間関係を築きあげることができる生徒

### 【中学校区のめざす子ども像】

ちがいを認め合い、豊かな人間関係をともに築きあげる子ども

### 生徒の願い

- ・文字を学び、豊かに暮らしたい。
- ・学びを取り戻したい。
- ・日本での生活の困りごとを聞いてほしい。
- ・夜間学級の存在が必要な人に届いてほしい。
- ・夜間学級の学びを充実させたい。
- ・日本で生活していくために困らない日本語の力を身につけたい。

### 【今年度の学校園経営方針】

- 自尊感情を育み、自ら考え、判断し、行動する意欲と力を培う。
- 自ら学ぶ態度や自らの思いや願いを発信できる表現力、言語力を培う。
- 人権尊重の精神に徹し、異なる国・民族を互いに尊重し、認め合える集団を育成する。

目 標 点	社会参加に必要な基礎学力を身につける	「おとなの中学生」に自分の想いを綴る	人権尊重の精神に徹し、学びあい高め合う集団を育成する
目 標 設 定 の 理 由	◆自尊感情を高め、夜間学級で学んだことを糧に社会参加につなげていくため ◆仲間と協働しながら、主体的に学ぶ姿勢を育むため	生徒が自らの生い立ちと生活をとらえ返し、アイデンティティーの確立・自尊感情を高める実践を進めるため	様々な年齢、民族的な背景をもつ生徒集団にあって、互いのちがいを認め合い、支え合える集団を育成するため
取 組 み の 仕 掛 け	◆タブレット等のICT機器、AIドリルの活用 ◆新カリキュラムに沿った新たな授業の構築 ◆さまざまな背景のある生徒が安心して学べる学習環境づくり	◆「民族と文化」の授業 ◆「朝鮮文化に親しむ東大阪子どもの集い」「歓聚一堂」やさまざまな発表に向けての取り組みの充実 ◆外部への作文発表等による発信	◆近畿夜間中学連絡協議会との連携 ◆国際識字年推進東大阪連絡会、よみかきこうりゅうかい、国際交流フェスティバルへの参加 ◆意岐部中学校夜間学級との交流・連携
課 題 成 果	●タブレット等のICT機器やAIドリルを効果的に使い、基礎的な学習を進めることができた。 ●仲間の発言を共感的に聴くことができた。 ▲タブレットを頻繁に使用することで高齢の生徒の疲労感につながった	●毎日の学びや行事等での経験を踏まえて、生徒一人ひとり自分の言葉で作文を完成させることができた。	●近畿の夜間中学や、外部の団体との交流を進める中で多様な仲間と関わり、自身や他者を大切にする態度を育むことができた。 ▲行事が多く、もう少し時間が必要な取り組みもあった



来年度(2025年度)の研究テーマへ

## 研究テーマ「中学校教育を実施するために必要な日本語指導の在り方」

### 1. 研究の目的・問題意識

- ・目的：教科の学習に必要な日本語の習得について
- ・問題意識：国籍や年齢、就学経験の異なる生徒の学力や日本語力の違いに対応する学習

### 2. 実施に向けて検討した方策

- ・習熟度に応じた対応
- ・日本語習得状況に応じた対応
- ・各言語への対応
- ・研修を通じた教員の指導力の向上

### 3. 検討した方策の分析

- ・全生徒の各教科習熟状況と日本語習得状況等に合わせた定期的な学級編成の必要性

### 4. 実際に行った方策

◇特別な教育課程の編成：習熟度別学級編成による授業

〈西野分校〉：国語、社会、数学、理科、英語は、それぞれ全校を6学級の習熟度別学級に編成

〈北分校〉：国語は、全校を7学級の習熟度別学級に編成。

数学、英語は学年別に3学級ずつの習熟度別学級に編成

※実技科目については、2校とも全校を1学級として、教科担任を中心に全職員で授業を実施

◇具体的な活動内容

- ・教科指導：既存の教材及び生徒に応じて作成した教材の活用（パワーポイント、デジタル教材等）  
各言語に翻訳対応した学習プリントの使用、多文化共生サポーターによる支援
- ・日本語指導：既存の教材及び生徒に応じて作成した教材の活用（パワーポイント、デジタル教材等）  
外部講師による日本語指導
- ・作文指導：1年間の作文活動を通じた自己の振り返りと日本語理解⇒作文発表会、文集製作
- ・人権学習：様々な考えや価値観の違いを理解⇒お互いを認め尊重すること
- ・GIGA 端末を使った授業：調べ学習、学習問題作成、学習発表等
- ・「日本語指導と教科指導の橋渡し」をテーマとした教員研修の実施

### 5. 生じた成果・効果

- ・各教科授業や日本語指導による学習理解の深まりと日本語の習得。  
生徒個々の学習状況に応じた授業の組立ができ、学習内容の理解と授業を通じた日本語の習得につなげていくことができた。また、各生徒の学習状況等を全職員が共有することにより、学級の引継ぎ（クラス変更）のための情報交換を容易に行うことができた。ただし、本年度は初級クラス（来日半年未満程度）に所属する生徒数の割合が高く、授業を担当しない教員の動員も必須となった。しかし、その取組によって生徒が置き去りにされることなく授業での対応を可能なものとすることができた。
- ・教職員や生徒同士、他校生徒との交流を通じた様々な日本語の習得や他の言語とのふれあい  
⇒成就感、達成感の醸成⇒学習意欲へのつながり⇒自己肯定感の向上、他者理解

### 6. 課題

- ・教員の日本語指導力の向上  
生徒の学習活動へのより確かな見取りにつなげるための日本語指導の知識とスキルの充実。  
日本語指導と教科指導の“橋渡し”を実現すべく、「みんなの日本語」における各課の文型等を教員が共通理解し、積極的に授業に取り入れていく（本年度からの継続）

## 7. 調査研究を踏まえた今後の取組方針

- 日本語指導に関する職員研修の充実

外部の専門家を招き、日本語指導研修を重ね、指導法や最適教材、教育環境のアップデートを図る。日本語指導と教科指導の“橋渡し”をテーマにした研修の充実を、次年度にも図りたい。研修の形式としては、本年度同様、実際の授業を想定した研修が有効と思われ、同時に、各学期に行えるような短い期間での研修が効果的である。

- より効果的な学習教材の作成

個々の生徒の学習理解の程度に応じた教材、教具の作成

当面の間は、「みんなの日本語」を中心とした教材づくりが望ましいと考えられる。学校全体で日本語指導と教科指導の“橋渡し”をテーマとした研修に取り組むがゆえ、日本語で対応する生徒に対しても、“やさしい日本語”“わかりやすい日本語”につながるものと思われる。

## 【調査研究事項Ⅰ】尼崎市立成良中学校琴城分校

### 1 調査の目的・問題意識

尼崎市立成良中学校琴城分校は、在籍する生徒の年齢は17歳から88歳までと幅広く、70歳代以上が生徒数の半数近くを占める。また、外国籍生徒が在籍生徒数の半数を超え、今後も増加していくことが見込まれる。

生徒一人ひとりが、自他を尊重しつつ自己実現を図ることができるよう、言語力をはじめ基礎的・基本的な学力及び健康で文化的な生活を送れるよう教育活動の充実を図る必要がある。生徒一人一人の背景が大きく異なることを踏まえ、個の尊重の観点から、特に「ことばの大切さ」を中心とした支援体制を強化していきたい。

また、日本語支援が必要な生徒数が増加していることから、日本語指導及び支援の視点で、多様な生徒に対応した教育課程の編制を行い、教育活動の充実を図っていかねばならない。

様々な社会的背景を持つ生徒にとって、安心感のある充実した学習環境を整えていき、高齢や日本語理解の問題だけではなく、様々な社会的な背景を持つ生徒が安心感のある充実した学習環境を整えていく必要がある。

### 2 調査研究の成果

#### ○高齢者や外国人向けのカリキュラム開発

・大阪産業大学国際学部国際学科 教授 新矢麻紀子を教員研修の講師として招聘し、「今日の夜間中学における識字・日本語指導について」をテーマにした教員研修を行った。「第二言語としての日本語習得に向けて、即興的対応と長期的対応」や「日本語を教える際に留意すること」など、効果的な日本語指導方法や多様な生徒への効果的なカリキュラムについて学び、意見交流を交えながら学びを深めた。



・神戸YWCA学院の識字・日本語指導講師  
斎藤明子氏を研究授業や研究協議に招聘し、  
教員研修を行った。近年、中国帰国者やその  
家族をはじめ、新渡日のネパール人など、日  
本語習得を求める生徒が急増している。その  
ため、教科の学習以外に日本語の習得も視野  
に入れた指導が求められている。そこで、  
「第二言語としての日本語」教育の指導につ  
いて指導・助言を受けた。



#### イ. 不登校経験者支援のための相談体制の整備

・大阪入国在留管理局在留支援部門 総括管理官  
森脇 勝二氏を教員研修の講師として招聘し、在  
留資格について、家族滞在で入国した人は、日本での  
生活や日本で働く場合、多くの制限がかかることを、  
資料で説明いただき、人権教育の推進・拡充を図る上で、  
学びを深めた。



・尼崎市立歴史博物館の辻川敦氏を講師として招聘し、  
太平洋戦争やその後の尼崎について写真を見ながら  
講話してもらい、その時一所懸命生き抜いてきた人  
たちの命や平和について考え、尼崎の歴史や命の尊  
さについて考えを深めた。



### ○他市町村の夜間中学との連携

・全国夜間中学研究会第70回東京大会では、尼崎市から2日間のべ4名の教員と4名の生徒が参加し、1名の教員が分科会で発表した。また、兵庫県内4校の連携強化に加えて、全夜中研や近夜中協との関係の充実を図ることもできた。夜間中学の直面する課題については、急増する海外からの生徒への対応や、夜間中学における教育課程やカリキュラムの編成など、他市町でも同様であり、情報共有等を綿密に行うことができた。夜間中学の充実に向けては、取組の一層の推進が求められているなか、さらに横のつながりを密にしていきたい。



### エ. 専門スタッフ（通訳など）を活用した教育活動の在り方について

・外国籍の生徒が多いため、学校行事の事前指導や校外指導における支援員等を別途補完的に招聘した。言語が通じることにより、道中の安全面だけでなく、活動中の充実した学びが保障され、生徒も安心して学業に専念できた。また、生徒の体験的な学びが深まるよう配慮した。

通訳等の専門スタッフがいて、伝えたい言葉が通じることによって、生徒の心の安定につながっている。安心して学べる環境づくりをすることが、登校刺激になるとともに、より一層の学習意欲になるため、引き続き活用していきたい。



#### オ. 経済的負担を考慮して効果的な行事や校外学習等の在り方について

校外学習に参加する費用が高額になると参加を断念する生徒が増えることから、校外学習でバスをチャーターして篠山城を見学し立杭焼を体験した。外国籍の生徒が日本文化に接することで日本に興味を持った外国籍の生徒が増えた。また、バス移動により経済的負担の観点のほかにも電車での移動に負担を感じている年を取った生徒についても今回は参加率が増加した。

特に60代以上の生徒が11名（内80代が7名）も参加することができたことで、泊を伴う学校行事のない本校にとって大変意義のある校外学習となった。「自分では行けないところへ行ったので嬉しかった」「バスでみんなと一緒にいけて嬉しかった」などの感想があり、校外学習を計画する際は、高齢の生徒が参加できるものを計画する必要があることが改めて分かった。



#### カ. ICTを活用した生徒の学習活動の支援について

授業において、ほとんどの授業でICTを活用し、動画教材等で視覚的支援に努めた。さらには本校勤務のICT支援員と連携し、技術の授業において、プログラミングの基礎を取り入れた。生徒によって理解度が異なるため、一斉に授業をすることが難しかったが、今後の社会的自立に向けてとても良い機会となった。



### 3 今後の取組方針

本校では、様々な社会的背景のある多様な生徒に対応していく必要があり、特に今後も増加することが見込まれる外国籍生徒への支援を継続して充実させる必要があるため、通訳などの専門スタッフの活用が引き続き必須であると考えます。安全面に配慮し、必要に応じて母語で話せる場面を増やすとともに、専門スタッフと情報共有を密にし、外国籍生徒へのこ

ころのケアや悩みなどに寄り添っていきたい。

また、学びたいと思う生徒の気持ちを尊重するため、高齢者や外国人向けのカリキュラムを引き続き研究推進する必要がある。本校では年2回の公開研究授業を行い、教員の授業力を高めると同時に、生徒にとって魅力ある、個別のニーズに合った授業づくりにつとめている。重点を置いて取り組んでいる日本語識字カリキュラムを中心とし、柔軟な学習環境を整えるとともに、生徒が安心して学べる環境づくりに努めていく。来年度も引き続きJSLカリキュラム導入に向けて情報収集を随時行っていく。

また、学校行事の目的は学習指導要領に「望ましい集団活動を通して、新進の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」とあるように、生徒にとって大変意義のあるものと考えている。今年度も貸し切りバスで校外学習へ行くことができたため、多くの生徒が参加することができた。高齢の生徒がいる本校において、公共交通機関を利用するのは、金銭面だけでなく体力的にも限界がある。校外学習を計画する際は、高齢の生徒が参加できるものを計画する必要があることが改めて分かった。多くの経験ができるよう、生徒の負担が少ないよう今後も計画・実施をすすめていきたいと考えている。

研究テーマ：②「不登校経験者向けの支援の在り方」

③「中学校教育を実施するために必要な、日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方」

## 調査の目的・問題意識

### ◆目的

- ・不登校をはじめ多様な背景を持つ生徒支援のための相談体制や自立支援のための体制の整備を行う。
- ・日本語について、様々な課題を持つ生徒一人ひとりの学びの充実を図るため、効果的な指導方法や体制についての方策を探る。

### ◆問題意識

- ・不登校支援として、これまでの情報収集をもとに見えてきた課題に対して相談体制を整備、関係機関への接続など生徒個別の課題に対応する具体的な支援体制のさらなる充実を図る必要がある。
- ・「自立」とは「困っているときに頼る相手を見つけ増やしていくこと」ととらえ、困り感を持つ生徒を社会とつなげるための地域や関係機関との連携を図る必要がある。
- ・地域日本語教室と連携した日本語指導や大学生等のボランティアを活用した学習指導（主に日本語指導）体制の整備を図る必要がある。

## 創出した先進事例

### ◆実施に向けて検討した方策

実施に向けて8つの方策を挙げ検討した。

- 1 地域や関係機関との連携
- 2 ケース会議の実施
- 3 生徒個々の傾向やニーズの把握
- 4 職員研修の充実
- 5 地域日本語教室についての状況調査
- 6 大学生等のボランティアの活用
- 7 交流の時間の工夫
- 8 効果的な日本語指導方法や体制の方策

### ◆検討した方策の分析

検討した方策8つを分析して4つに絞った。

- 1 困り感を持つ生徒に対して、必要に応じ関係機関と連携を図り、適切な支援を行う。
- 2 地域日本語教室と連携した日本語指導や大学生等のボランティアを活用した学習指導及び相談活動や自立支援を行う。
- 3 効果的な日本語指導方法について、職員研修の充実や校内研究授業を行う。
- 4 生徒個々のニーズに応じた教材作成や学習環境の改善を図る。

### ◆実際に行った方策

4つの実際に行った方策について、以下1～4に示した。

- 1・7月に、「不登校経験のある形式卒業生の対応について①～困り感を持つ生徒を社会とつなげる～」をテーマにNPO法人の講師を招き、校内研修を行った。地域・社会とどのようにつなげるか、また、生徒自身が「助けて」と訴えることで援助を受ける力（「受援力」）を高めていくにはどのようにすればよいか等を校内で協議し、生徒が自分の困り感を教員や生徒同士で話すことができる力を身につけるための支援に力を入れた。

- ・ 8月に、校外職員研修として、先進校の堺市立殿馬場中学校夜間学級の学校見学・交流に参加し、不登校経験者向けの支援の在り方・中学校教育を実施するに必要な、日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方について、当該校での取組から学ぶことで、授業外の学校生活レベルで、生徒が日本語の使用機会を増やす取組を実践した。
- 2・ 10月に校内研修として「不登校経験のある形式卒業生の対応について②～不登校の子どもたちもそれぞれの特性がある～」をテーマにNPO法人より講師を招き、校内研修を実施した。フリースクールに通う不登校生徒の生活や学習の様子を知り、困難を乗り越えて進学や社会に進出した個別のケースの話を知ることができた。その後、夜間学級を学ぶの場のみならず生徒の居場所としての機能を充実させるため、生徒のニーズや思いを尊重するための相談体制の充実を行った。
- ・ 大学生ボランティアが学習支援に入ったことにより、生徒の学習の困り感を丁寧に聞き取ることができた。また、授業外での生徒の学校生活の支援についても、普段教員の目の届かないところに対して、支援の手を広げることができた。
- 3・ 6月に1回、7月に1回、11月に1回と「日本語指導力の向上にむけて、日本語を指導する方法について基礎編・初級編・中級編」をテーマに日本語指導の講師を招き、校内研修を実施した。教員の指導内容のスキルアップを図るとともに、教員の指導における悩みや質問に対して助言を受ける時間を多く設けた。教員は、受けた助言を授業の改善に活かすことで、生徒の授業に対する意識向上につながった。
- ・ 9月には、前回の研修内容を踏まえ、「日本語指導力の向上」をテーマに校内研究授業を行い指導方法の改善を図った。研究授業に地域日本語教室の日本語指導の専門家を招き指導・助言を受けた。研究授業や協議から得られたことをその後の日本語指導の授業実践に生かした。
- 4・ 12月の第70回全国夜間中学校研究大会・東京大会に2日間参加した。分科会や授業見学を通して、不登校経験者向けの支援の在り方・日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方について学び自校での実践に生かした。また、本調査研究テーマの深化を図ることができた。

## ◆ 生じた成果・効果

実際に行った方策4つの生じた成果・効果について

- 1・ 研修では、不登校経験のある形式卒業生の対応について、「相手の立場になって、相手がどのように考えているのか、どのような感情を持っているのか、想像し理解する力」いわゆるエンパシーが大切であると理解できた。また、「教員だけでできることは限られている。心理、福祉等に関する専門的知識を有する方々との連携」、「チームが必要、ケース会議を活用する」など、不登校生への対応の仕方を色々学ぶことができた。そして、生徒の保護者と定期的に懇談を行い、市教委の指導主事とスクールソーシャルワーカーとも定期的にケース会議を行うことができた。
- ・ 他校を視察したことで、自校の取組の改善を図ることができた。特に、不登校経験者のサポートについては、入学相談時から、しっかりと聞き取りをし、本人の意向を尊重するようにした。また、日本語指導については、授業だけでなく交流の時間においても、日本語で自己紹介を聞くことや、自分のことを自己表現する場を設定する工夫をすることができた。
- 2・ 研修後は、不登校経験のある形式卒業の生徒に接する際に、様々な背景を考えながら、本人とのやりとりを大切にしながら指導することができた。また、教員同士でも連携し、共通理解を図り、関わり方を検討できた。
- 3・ 校内研究授業や協議には、地域日本語教室の日本語指導の専門家も参加し、意見交流することができた。研修では日本語を母語としない学習者に日本語を教える際に留意すべきことから文法に重点をおいて講師より解説してもらった。このこと受け、教員は動詞の基本活用では「ます形」「て形」「た形」「ない形」「辞書形」が最も重要であることが理解できた。研修の授業では、教員は日本語の動詞をⅠグループの動詞と、Ⅱグループの動詞と、Ⅲグループの動詞に分けることから生徒に教えることができた。また、「て形」の作り方には、「て形の歌」を活用して教えることができた。
- ・ 生徒は「辞書形」と「ます形」の分け方と作り方ができて、丁寧体と普通体の意味を理解できるようになった。「辞書形」と「ます形」の作り方がわかると、動詞のグループ分けも簡単になった。そして、「て形」がわかると、「た形」もわかり、「～しています」「～してもいいですか」「～したことがあります」などのような「て形」「た形」をもとにした表現を作れるようになった結果、難しい日本語の文章を話したり書いたりする表現がわかりやすくなるようになった。
- 4・ 2024年度第70回全国夜間中学校研究大会・東京大会に2日間参加した。大会後、夜間中学の歴史や、時代の流れによる編成等の学んだ内容と現在の夜間学級の抱える課題や社会的な役割について、HP等を通じて地域に広報した。同大会の分科会発表や公開授業を見学したことにより、教員が生徒とのコミュニケーションをできるだけたくさん取るように声かけや話がけを普段の生活の中で心がけるようになった。この変化により、学校生活で生徒の笑顔が多く見られるようになり、自分の言葉で気持ちを話せるようになった。また、交流の時間には、生徒と教員でカードゲームに取り組むなどのレクリエーションを取り入れることで、教員との心理的な距離が近くなり、生徒の相談体制の充実につながることができた。

## ◆課題

- ・不登校支援として、これまでの情報収集をもとに見えてきた課題に対して相談体制を整備し、関係機関への接続など生徒個別の課題に対応する具体的な支援を実施してきたが、個別の課題が変化することで、対応も変わってくることを考えると、この体制のさらなる充実をはかる必要がある。
- ・夜間学級における日本語指導について職員研修をしたが、日本語学習を始めたばかりの外国籍生徒には、学習者がつまづくポイントなどを知ることで、生徒の習熟度を意識した指導ができた。一方で、卒業後の進路獲得のための学力を身につけるための日本語指導の方法については課題が残った。生活日本語と学習日本語についての両方の指導方法を学ぶ必要性があり、そのために、継続的に職員研修や研究授業を通じた指導方法の改善や授業実践に努める必要がある。

## 調査研究を踏まえた今後の取組方針

### ◆教育課程の編成 / 教育環境の整備・充実

- ・不登校をはじめ多様な背景を持つ生徒支援のための相談体制や自立支援・高校進学のための体制を引き続き行う。
- ・日本語について、様々な課題を持つ生徒一人ひとりの学びの充実を図るため、効果的な指導方法や体制についての方策をさらに探る。

※本内容は文部科学省 Web サイトに公表する。

## 【調査研究事項番号 I-③】広島市立観音中学校

研究テーマ「中学校教育を実施するために必要な、日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方」

### 1 調査の目的・問題意識

本校夜間学級には日本国籍、中国国籍、フィリピン国籍の生徒が在籍し、年齢層は10代から60代と幅広く、学習歴も様々である。義務教育内容の習得が不十分な生徒だけでなく、それに加えて日本語の習熟度が低い生徒も多く在籍している。そのため、個に応じた教科指導はもとより、多くの生徒は中学校教育を実施するために日本語指導が必要である。日々の教育活動における指導の課題及び課題の背景等については、次のとおりである。

(指導の課題)

- ・ 日本語の習熟度が低く、また、学習速度も遅い生徒に対する学習指導
- ・ 継続的な登校が困難なため日本語の定着度が低く、初級後半レベルの日本語学習が難しい生徒に適した学習指導
- ・ 日本語学習を主とした学習段階から、教科学習を主とした学習段階へ移行した生徒に対する教科指導
- ・ 義務教育内容の習得が不十分な、学び直しの日本人生徒に対する教科指導
- ・ 高校進学希望者の学力保障

(上記課題の背景等)

- ・ 国籍・年齢も母国での学習歴も来日後の生活環境等も出席状況までも異なるさまざまな生徒が、少人数グループであるとはいえ、一斉授業で日本語初級から学習するため、生徒間の日本語の学習速度や習熟・定着度には大きな差がある。
- ・ 出席状況や生徒の年齢差による、日本語初級の前半終了時点での学習内容の定着に差が生じている。そのため、既習事項の定着を前提として展開される、教科学習の学習内容理解が困難な生徒が多い。
- ・ 日本語教材だけで行う日本語学習では、日本語力はある程度までで進歩が滞ってしまいがちである。日本の文化・社会・歴史・生活習慣等を幅広く学ぶことによって全体的な日本語力の向上は図れるが、生徒の多くはその認識までには達していない。また、生徒の日本語能力と中学校教科書で必要とされる日本語力にはかなりの開きがあるため、日本語による教科学習はまだ早いと考える生徒も多い。
- ・ 既卒者（日本人の学び直しの生徒）・義務教育内容の習得が不十分な生徒に対し、「工夫された授業」による効率よく学習指導し短期間で成果を上げる方法について調査・研究する必要性が生じてきている。

以上のような状況の中で、より効果的で生徒の学習意欲を高める取組を行う必要があることから、日本語指導チーフ・教科指導チーフを中心に効果的な日本語学習自主制作教材の作成及び「行事を通じた日本語指導」について調査研究する。

## 2 創出した先進事例

### (1) 実施に向けて検討した方策と検討した方策の分析

調査の目的・問題意識を踏まえ、本年度は次の5つの方策の検討を行った。

- ① 教員研修
- ② 情報収集
- ③ 授業実践
- ④ 行事を通した日本語指導
- ⑤ 教材作成

### (2) 実際に行った方策と生じた成果・効果・課題

#### ① 教員研修

年間3回（4月、7月、10月）、学校内外で教員による授業に関する研修会（広島市中学校教育研究会の外国人及び学び直し生徒等支援教育部会）を開催し、研究授業や多様な生徒に対する使用教材・指導方針・方法について意見交換を行い、学習指導に対する理解を深めた。

また、二葉中学校夜間学級担当教員と合同で日本語指導に係わる校内研修会を実施し、県立広島大学の中石教授から、学習者の日本語習得の過程や日本語指導の基本的な指導方法について学ぶ機会を設けた

#### ② 情報収集（東京都荒川区立第九中学校視察）

荒川区立第九中学校に在籍している生徒は、本校と同様に外国籍の生徒が多い。しかし年齢層は10代が多く、高校進学を希望している生徒が多い。そのため5教科の授業も多いが、数学や英語では2クラス合同で授業を行ったうえで、さらに日本語力や教科の習熟語により4チームに分けて授業を行うなど、細やかな指導が行われていた。

現在、本校でも生徒の学習歴の差が課題となっている。小学校の内容から学び直しを行わなければならない人もいれば、受験をするために中学校の学習内容を進めている人がいる。数学・英語の学習をコースに分けることなどを参考に、本校にとって最適な形態を探りながら、実践に取り組んでいきたい。

#### ③ 授業実践

地域交流や文化体験を通して日本語に触れさせ、日本人と直接話すことで自分の日本語力を確認させる機会をもつことができた。また教科指導グループにおいて、研修や各自収集した情報を活用し、生徒実態に応じた学習教材を準備し、分かりやすい授業づくりに努めた。さらに今年度は特にITC等の活用を通して、日本語の授業と連動したシャドーイング練習や、日本語の授業における導入や復習を行い、主体的な学びにつなぐことができた。

#### ④ 行事を通した日本語指導

- ・ 生徒の健康状態の把握と一人ひとりが安心・安全に学校生活を送るために、本年度も養護教諭を中心に保健指導を行った。新型コロナウイルス感染症をはじめとした感染症対策は、継続

して行う必要がある事から、感染症の情報をタイムリーに伝え指導した。また、高温傾向が懸念される春から秋にかけての熱中症について、熱中症予防について指導をした。【資料1】

- ・ 国際理解講座では、本年度は日本の伝統衣装である浴衣の着付け体験を行った。ただ着るだけではなく、浴衣の構造なども学び、衣服がどのように現在の形になったのか変遷を学ぶことができた。また、生徒は自国の衣服との共通点や相違点に気づき、自らの生活を振り返るきっかけとなった。【資料2】
- ・ 校外学習では、広島市安佐動物公園に校外学習に行き、日頃教室で学んでいる内容を校外で実践学習をすることができた。動物レクチャーでは、飼育員の方に日本語でクロサイについての説明を受け、動物に関する理解を深めた。また、午後からはチーム対抗クイズラリーを行い、国籍・年齢関係のない交流を深めることができ、生徒間の絆が深まったと考える。【資料3】

〔参考〕令和7年度 日本語指導に係る主な実施行事

5月	校外学習	～自然体験を通して～
6月	地域交流	～公民館活動の体験を通して～
7月	国際理解講座	～日本の伝統衣装にふれる～
9月	校外学習	～自然体験を通して～
12月	音楽会	～演奏会での交流を通して～
2月	国際理解講座	～日本文化にふれる～

#### ⑤ 教材作成

I T C等の活用を通して、日本語の授業と連動したシャドーイング練習や、日本語の授業における導入や復習を行い、主体的な学びにつながることができた。欠席しないで授業を受け、学習が継続できた生徒については、学力や日本語力の向上につながっている。自信をもつことが学習意欲の向上にもつながるため、引き続き生徒への根気強い声かけと、学校へ行って勉強しなければ損をすると思える魅力的な授業、教材作りを工夫していく。【資料4】

### 3 調査研究を踏まえた今後の取組方針

- ・ 教員研修について、本年度は、大学から講師を招聘し、「学習者の日本語習得の過程及び基本的な日本語指導方法等」について、講義演習を交えながら研修を行った。

次年度は、大学から講師を招聘するとともに、研修形態を授業研究・授業参観・協議・指導助言で年間を通して複数回行うことで、さらに日本語指導の実践力を高めたい。

- ・ 学習形態について、現在本校では、日本語指導を2つのクラスで実施し、年度途中で生徒のクラス替えを行っていない。生徒の学習進度の差に対しては個別指導を行っているが、学習進度の差が開くほど指導の難しさを感じている。

現在行っている日本語の定着状況を把握するための問題を再検討するとともに、年度途中でのクラス替えについて検討したい。